

NEWSLETTER NO.16

【九州北部豪雨災害支援】 九州キリスト災害支援センターとの 連携の始まり

7月5日～6日にかけて発生した九州北部地方における豪雨災害は、福岡県朝倉市・東峰村・大分県日田市に甚大な被害をもたらしました。この度、CWS Japanは九州キリスト災害支援センター

（九キ災）から要請を受け、8月の1か月間、スタッフ1名を派遣し朝倉市杷木地域における住民の生活再建支援に入っています。九キ災は、昨年の熊本地震発生時に九州のプロテスタント（福音派）の牧師数名の想いによって被災地で発足しました。熊本県益城町仮設住宅での支援活動を続けながらも豪雨災害発生から2週間後には、日田市に支援現場事務所の拠点を構え、地元の日田福音キリスト教会竹崎牧師がディレクターに就任しました。

今回のCWS Japan - 九キ災の連携は唐突に始まりました。九キ災については、被災地と周辺の教会との連携協力によって組織化されたという経緯に以前から注目していました。立ち上げに関わったキーパーソンである中村牧師*に一度話を伺いたいと連絡を取り、同氏が上京する予定だった7月末を待ちました。そんな時に7/5の豪雨災害が発生したのは運命的でした。東京のホテルでの中村牧師との面会は日田ベースが開所した翌週のことでした。九キ災の設立経緯についてお話を伺った後、最後の方で「日田ベースに応援に来てよ。」と唐突に依頼され大変驚きました。



朝倉市杷木東林田地区での作業の様子

九キ災では、この度の支援活動は緊急期の3か月と決めていましたが「3か月が無理だったら1か月でもいいから来て欲しい」というお話でした。

その時は予期せぬ話にポカンとしたのですが、帰宅後にCWS Japanが参画する意義を感じ、翌朝内部で話し合い派遣が決まりました。そして、4日後に九州入りしました。現在、CWSの他にもクリスチャンNGOである日本国際飢餓対策機構とオペレーションブッシング・ジャパンが協力団体として参加し、各団体1名ずつスタッフを九キ災に派遣しています。このように4団体連携による緊急支援で一緒に働かせてもらっています。ボランティアも日替わりで、国内外からグループ・個人が多数参加し日々同じ現場に入っています。

被災地での活動と被災者との対話からは何物にも代えがたいリアリティとインパクトを感じています。災害により、それまで隠れていた社会的課題や社会の非条理が全て地域の中でさらけ出されていきます。

*中村陽志(ようじ)：熊本ハーベストチャーチ牧師
「心の居場所が見つかれば人生はいつでもやり直せる：200人の受刑者が生まれ変わった教誨師の軌跡の言葉」著者
(2015年：マガジンハウス)

九州北部豪雨災害支援活動の様子やストーリーはCWS JapanのウェブサイトとFacebookに随時掲載していますので、どうぞご覧下さい

【CWS Japanウェブサイト】

<http://www.cwsjapan.org/>

【Facebook】

<https://www.facebook.com/CWSJapan/>

(文：プログラムオフィサー 牧 由希子)



被災状況について被災者と語らう

【フェリシモ地球村基金】 「ミャンマー・エーヤワディ地区における洪水被災者のための生活再建支援事業」完了のご報告

2017年1月から6か月間、CWS Japan 及びCWS Myanmar 事務所は、フェリシモ基金事務局「フェリシモ地球村の基金」を通じて、洪水多発地域のミャンマー・エーヤワディコミュニティを支援してきました。当事業をご支援くださった皆様本当にありがとうございます！

この事業では、洪水が原因でほとんどが日雇いの生活を強いられている2村（Auk Htone村とBar Ma Nee村）合計85世帯の人々に、損壊した家の修復と洪水に強いトイレの設置のお手伝いをしてきました。

私たちは、被災された方すべての力になることはできないため、現地でプロジェクトを進めるにあたって対象世帯の決定にはたいへん気を遣いました。優先度の高い家庭を選定し、また修復・設置技術の普及性を高めるために、ボランティア委員会の設立を実施しました。

まず、崩壊した家屋の修復ですが、対象の10世帯は、家屋そのものは河岸から離れた場所に移転し、手元にある素材や新たに購入した屋根を覆う板を利用した修復を約1か月で完了しました。



この高床式住居は、茅葺屋根（左奥）とトタン屋根（前部）を組み合わせた例です。家屋の骨組みだけの前面を、悪天候時には以前よりも大きな布（緑、オレンジの布）で覆います。建て増しの部分には茅の材料を利用しています。

次にトイレ建設について。5歳未満の子供やお年寄りと一緒に生活し、かつ衛生教室及び便器設置セッションに積極的に参加するという条件のもとに選定された85世帯に、10日間をかけて設置されました。



洪水に強いトイレは高額な場合が多く、限られた予算で取り付け可能なデザイン的设计もチャレンジの1つでした。女性や高齢者が世帯主の家族は人手を確保するのが難しかったにもかかわらず、プロジェクトを進行できたことはまさにコミュニティの結束があってこそだったといえます。

ご支援の結果、エーヤワディ地域マウビン・タウンシップの2村85名の皆さんに安全・安心を寄与することができました。彼らは鉄砲水や豪雨など厳しい気候から身を守る知恵と、雨季、乾季を問わず1年を通して使える衛生的な高床式トイレを設置するノウハウを身につけました。森で用を足さなくてよいことから蛇や虫にかまれることもなく、雨季に夜まで排便を待つ必要もありません。匂いや排泄物を恥ずかしがることなく用を足せることは、女性や子供にとってはたいへん意味のあることです。また、清潔な生活を送ることで、病気の心配をすることなく仕事や子供の教育について考える余裕が彼らの生活にでき、非常にうれしく思っております。

(文： プログラムオフィサー 阪口佳恵)

ISAP (International Forum for Sustainable Asia and the Pacific) に登壇しました！

対象世帯者からは、
「うちにもトイレはあったが、非衛生的で八工に悩まされていた。このままでは悪い病気にかかってしまうと思ったため、トイレ再設置に興味をもち、衛生教室とトイレの正しいメンテナンス方法を学ぼうと思った。今では匂いも減り八工にも悩まされていない。使用後には水で便器を流し、石鹸で手を洗っている」

「彼女たちが森へ行って用を足すことがなくなり、安全面で心配することがなくなった。その結果、家計について考える時間が増えた。」

「以前のトイレでは、ぐらつく壁は怖かったし、誰かにのぞかれているのではないかといつも怖い思いをしていた。暗くなるまで待つて用を足しに行ったり、生理のときは特に嫌な思いをしていた」

のような声をいただきました。

7月25日・26日に横浜パシフィコで行われたISAP（持続可能なアジア太平洋に関する国際フォーラム）にNGOの声を代表してCWS Japanが登壇しました。ISAPは毎年開かれている国際フォーラムで、気候変動や防災の専門家、政府、国際機関、企業、NGO関係者が一堂に会し、持続可能な開発についてアジア太平洋地域の視点から議論を行うフォーラムです。IGES（地球環境戦略研究機関）とUNU-IAS（国連大学サステイナビリティ高等研究所）、外務省などが主催・後援しており、今年で9回目の実施となりました。気候変動の影響は洪水や干ばつなどの気象災害の増加のみならず、食料価格の高騰や農業・漁業に与える影響など、社会全体に係る問題となっています。

NGOは現場の変化を敏感に感じていて、現場の問題意識をベースに増えるリスクへの対応案を次々と打ち出していかななくてはならないと強調しました。例えば雨量の変化が住民に与える影響など、一つ一つの課題を洗い出し、研究機関・国・企業・国連など、様々なステークホルダーを巻き込んだソリューションを作り出していく事が重要です。

CWS Japanではパートナーシップを大事にしていますが、21世紀の課題克服に少しでも寄与できるよう、今後もソリューション・プロデューサーとしての役割をNGOが担えるよう、努力していきたいと考えています。

(文：事務局長 小美野 剛)

パキスタンの大学にて新教科ワークショップを開きました！

8月15日から18日まで、パキスタン・ラホールにてプンジャブ大学、ペシャワール大学、シンド大学などの先生方へ向けたワークショップを行いました。これらはパキスタンを代表する大学ですが、この度NGOマネジメントコース及び防災に関する教科を設けるとの事で、教え方をNGOの観点からファシリテートして欲しいとの要請でした。今まで社会福祉に関する教科はあっても、NGOマネジメントや防災に関する教科は存在せず、昨今の増え続ける人道ニーズに対応する為にNGO界で活躍できる人材を輩出すべきとの大学側の判断があったようです。

人道・防災分野では最近「Localization」という言葉が良く使われます。簡単に言うと、現地の人たちのリーダーシップを尊重し、国際社会はそれを後押しすべき、という事です。が、今まで国際社会主導で行われてきた国際的な緊急支援・防災支援の枠組みがそう簡単には変わるものではありません。



IGES
外務省、研究機関、JICAと共にパネリストとして会場からの質問に答える小美野事務局長

また、現地のリーダーシップと言っても、やはり最後は「人」であり、リーダーを継続的に育む環境づくりが必要です。

人材育成という観点でとても重要な役目を大学は担っており、今後のパキスタンのNGOリーダーを輩出していくのも提供される教育の質によると言っても過言ではないでしょう。10年後、30年後を見据えた大学機関とのパートナーシップを今後更に強化出来ればと思います。

(文：事務局長 小美野 剛)



今回のワークショップを企画・参加くださった大学関係者と
(於：プンジャブ大学)